

# 『車里訳語』における音写漢字子音の特徴

富田愛佳

本稿では『車里訳語』を材料として18世紀タイ・ルー語形とその音写漢字を対照させ、音写に使われた漢字音の音節初頭子音ならびに末子音の状況を分析した。その結果、音写に用いられた漢字音は、おおむね北方官話と同様の歴史的変化をたどっていること、また、音節末鼻音の音写状況などから、同漢字音は現代の雲南漢字音と似た特徴をもつこと、が明らかになった。現代の雲南漢字音は、地域によって、中古音にあったそり舌音と非そり舌音の区別を残しているものと、それを失ってしまったものがある。タイ・ルー族の都であった景洪の漢字音は後者に属するが、音写に用いられた漢字音はこの区別を残しているため、別の地域の漢字音であった可能性が高い。

キーワード: 華夷訳語丁種本、車里訳語、タイ・ルー語、漢字音

## 1. はじめに

『車里訳語』はタイ・ルー語<sup>1</sup>と漢語の対照語彙集である(羅 1993, 西田 2000: 114)。明代から清代にわたって編纂された、漢語と他言語との対照語彙・文例集『華夷訳語』の1つで、編纂時期が最も遅い丁種本<sup>2</sup>に分類される。馮(1981)によれば、丁種本は清代の1748年に会同四訳館が設立された後に編纂された。したがって、『車里訳語』は18世紀後半頃のタイ・ルー語を記録したと考えることができる。管見のかぎり、現在は北京の故宮博物院図書館にのみ清代の写本が保存されている<sup>3</sup>。

「車里」とは、現在の中華人民共和国雲南省西双版纳傣族自治州の州都景洪の、漢族

<sup>1</sup> タイ・ルー語はLi(1977)の南西タイ諸語に分類される言語である。現代タイ・ルー語景洪方言(西双版纳傣語)の音素は以下の通り。

子音 21 /m, n, ŋ; p, ph[p<sup>h</sup>], b, t, th[t<sup>h</sup>], d, k, ʔ; ts, f, s, x, h; l; v[w~v~v], j; kw[k<sup>w</sup>], xw[x<sup>w</sup>]/

上記のうち、/m, n, ŋ, p, t, k, ʔ, v[w], j/が末子音になりうる。ただし末子音としての/v/は音声的には[w]でしか現れないので、以下/w/と書くことにする。

母音 10 /i, e, ε, a, a:, ɔ, o, ɤ, u, ʊ/

声調 6 /55, 51, 13, 11, 35, 33/

方言によって[x]と[k<sup>h</sup>]が音素として弁別されるところもあるが、景洪方言ではこの区別は失われている。

<sup>2</sup> 甲・乙種本には語彙集のほか「来文」と呼ばれる文例がついているが、丙・丁種本には語彙が収録されているのみである。

<sup>3</sup> 2007年12月、筆者は幸運にして『車里訳語』を筆写する機会を得た。閲覧を許可してくださった故宮博物院図書館館長の朱賽虹氏、閲覧許可を得るために協力してくださった中国社会科学院の烏雲高娃先生、閲覧に際し助言をくださった遠藤光暁先生、吉田豊先生、白井聡子先生、林範彦先生、鈴木博之氏にこの場を借りて感謝申し上げます。

また、本稿の執筆に際しては、京都大学言語学研究室および言語記述研究会の皆様からも多くの助言をいただきました。ここに感謝いたします。なお、本稿における誤りに関する責任は、当然ながら筆者にあります。

によってつけられた旧名である。17 世紀までタイ族は漢族王朝へ朝貢しながら西双版纳において自律的な政治を行っていたが、18 世紀になると清朝が西双版纳の漢族による支配に乗り出した (加藤 2000: 45)。普洱に漢族の地方政府が置かれ、『車里訳語』冒頭に「普洱府属」の文字があることから、当時の車里は普洱府の統括下にあったことがわかる。

『車里訳語』には 425 項目の語彙が収録されており<sup>4</sup>、これらの項目は意味によって 16 の「門」(部門) に分けられている。各項目は他の『華夷訳語』同様に 3 つの部分に分かれている。

(1)

(I) 当時のタイ・ルー語表記 : *fa*(2)

(以下この文字を「車里文字」と呼び、車里文字によって記された当時のタイ・ルー語形を「車里語形」と呼ぶ。)

(II) 漢語訳 : 「空」

(III) 漢字音写 : *fā*<sup>5</sup>

まず最上部に車里文字で書かれた項目があり、その下にその意味が漢語で記され、さらにその下に当時のタイ・ルー語を漢字で音写してある。漢字は 1 字が 1 音節であるため、タイ・ルーの 1 音節につき 1 字が音写にあてられている。

現代のタイ・ルー語にも文字はあるが、車里文字とは形が異なる。どちらもインド系の表音文字であるが、現代のタイ・ルー文字はビルマ文字に似た形の文字であり、車里文字はタイ (Thai) 文字に似た形をしている。車里文字にはすでに羅 (1993) によって推定音価が与えられている。それによると子音字母は 38 (高子音字 21、低子音字 17) あり、母音は子音字母のまわりに 10 種の母音記号や子音字を組合せて表記される。声調記号は 2 つある。

本稿では羅 (1993) をもとに『車里訳語』の車里文字の転写 (transcription) を行い、

<sup>4</sup> 羅 (1993) の記述では、『車里訳語』収録語彙数は 395 とあり、筆者が筆写したものとかなり数が異なる。羅 (1993) が研究対象にした『車里訳語』がどこに収められている写本なのかは明らかにされていない。あるいは 395 という数字は異なり語 (もしくは形態素) 数であるかもしれないが、虫食などの資料状態によって、現在異なり語数の同定は困難な状況にある。

<sup>5</sup> 便宜上ここでは現代北京音をあてた。

あわせて音写に使われた漢字音を調べてその対応を観察した。車里文字は他の多くのタイ諸語を表記する文字と同様、祖語の子音類に応じて分かれた子音字グループをもつ。車里文字には高・低という2つの子音字グループ<sup>6</sup>がある。転写に際しては高子音字と低子音字を区別するため、それぞれローマ字の大文字、小文字で書き分けた<sup>7</sup>。2つの声調記号にはそれぞれ(1)、(2)と名前をつけ、その声調記号が振られた音節の最後に記した<sup>8</sup>。この部分は翻字(transliteration)の立場をとっている。例にはそれぞれ現代タイ・ルー語形を付した。それらは転写した車里語形と非常によく対応している。

本稿では、『車里訳語』における車里語形とその漢字音写を対照させ、音写に使用された漢字音の特徴を整理する。今回は初頭子音および末子音を対象とする。

## 2. 漢字音の調べかた

車里文字と漢字音の対応をみていく前に、はじめに当時の漢字音を知るために今回行った手続きを簡単に紹介しておく。

『車里訳語』で音写に使われた漢字は321種あった。まずこれらの漢字が中古音でどのような初頭子音類(「声紐」)や大まかな韻類(「撰」<sup>9</sup>)であったかを李・周編(1999)を用いて調べた。そして、それぞれの車里文字子音字母に対して、初頭子音の場合ほどの初頭子音類で音写されているか、末子音の場合ほどの韻類で音写されているかをつきあわせて観察した。

今回扱いたいのは18世紀後半の漢字音であるが、中古音は隋唐代の漢字音である。当然ながら中古音から現在に至るまでに初頭子音や韻は変化し、いくつかのものは合流したが、方言によっては中古音の区別を保存していることがあるため、現在でも漢語方言の漢字音調査には中古音の初頭子音類や韻類が重要な位置を占めている。こうした理由から、今回は中古音の分類を利用した。初頭子音類は李・周編(1999)の依拠した『方言調査字表』のものに基づいている。『方言調査字表』では、中古音36に、後代に両唇

<sup>6</sup> 「高」「低」の呼び名は声調の高低を表すものではなく、タイ祖語での頭子音類に由来する。タイ祖語の頭子音類は3つあり、伝統的にそれぞれ\*H(高)、\*M(中)、\*L(低)と呼ばれている。頭子音は祖語における音声的特徴によって分類されている。\*Hには無声有気破裂音、無声摩擦音、無声共鳴音などが属し、\*Mには無声無気破裂音(前声門化した有声音も含む)、そして\*Lにはその他の有声音が含まれる。祖語におけるこの3つの頭子音類は、現在の個別のタイ諸語においては必ずしもそのまま保持されているわけではないが、個別言語の声調の決定に重要な役割を果たしている。文字を持つ言語では、標準タイ語のように子音字に祖語の頭子音類の別が残っている。これによって、言語変化の結果、現代語では音価が等しくなった頭子音であっても、祖語の頭子音類が違っていれば異なった子音字で表記される。高子音字、中子音字、低子音字のような呼び方はすなわち、祖語の頭子音類\*H、\*M、\*Lに対応していることを示している。現代タイ・ルー語では祖語の\*H、\*Mは合流して1つの類になった結果、高(\*H、\*M)・低(\*L)という2つの種類の子音字を持つに至った。羅(1993)によれば車里文字も同様に高・低の2つの子音字類を有している。

<sup>7</sup> 羅(1993)の車里文字子音字母38を転写した形でここに挙げておく。

高子音字: M, N, PH, P, B, TH, T, D, KH, K, ʔ, TS, F, V, S, X, H, L, J, KW, XW

低子音字: m, n, ɲ, ph, p, t, kh, k, ts, f, v, s, x, h, l, j, xw

<sup>8</sup> 例えば、(1)に挙げた項目「天」の「fa:(2)」はfa:の音節に声調記号(2)が振られていることを示している。

<sup>9</sup> 音節の中核となる母音と語末子音の組合せを16の大きな枠組に分類したものの。

破裂音の系列の一部が弱化（「軽唇音化」）して区別されるようになった4つの軽唇音（下表では\*で標示）<sup>10</sup>を加えた40個を採用している。

(2) 『方言調査字表』に基づく初頭子音類のリスト（[]内は推定音を表す。）

唇音	幫 [p]	滂 [pʰ]	並 [b]	明 [m]	
	非* [f]	敷* [fʰ]	奉* [v]	微* [m]	
舌音	端 [t]	透 [tʰ]	定 [d]	泥(娘) [n]	
	知 [t]	徹 [tʰ]	澄 [d]		
牙音	見 [k]	溪 [kʰ]	群 [g]	疑 [ŋ]	
齒音	精 [ts]	清 [tsʰ]	從 [dz]	心 [s]	邪 [z]
	照 <sub>2</sub> (莊)[tʂ]	穿 <sub>2</sub> (初)[tʂʰ]	牀 <sub>2</sub> (崇)[dz]	審 <sub>2</sub> (生)[s]	
	照 <sub>3</sub> (章)[tʃ]	穿 <sub>3</sub> (昌)[tʃʰ]	牀 <sub>3</sub> (船)[dʒ]	審 <sub>3</sub> (書)[ʃ]	禪 [ʒ]
喉音	影 [ʔ]	喻 <sub>3</sub> (雲)[ɦ]	喻 <sub>4</sub> (以)[j]	曉 [χ]	匣 [ɣ]
半舌音	來 [l]				
半齒音	日 [n]				

(3) 中古音で末子音をもつ韻類（撰）

撰の名称	音節別の末子音の種類	
通、江、宕、梗、曾	平音節	-ŋ
	促音節	-k
臻、山	平音節	-n
	促音節	-t
深、咸	平音節	-m
	促音節	-p

なお、(3)のほか、音節末尾が母音のものが7つある（止、遇、蟹、效、果、假、流）が、本稿では扱わない。本論では、以上のようにして調べた音写漢字の初頭子音類と韻類が、どの車里文字で書かれた項目の音写に使われているかをつきあわせ、その結果を分析した。

以下の3節では、音節末鼻音の音写状況を紹介する。つづいて4節で北方官話がたどった変化をまとめておく。5節では車里文字の音写状況を現代北京音、現代雲南音を随時ひきあいに出しつつ観察する。6節は全体のまとめを行う。

<sup>10</sup> 中古音の韻書『広韻』では幫、滂、並、明とこれら4つは区別されていないが、宋代の韻書『集韻』では区別されており、『方言調査字表』は後者になっている。

### 3. 車里語形音節末鼻音の音写状況

音節末に車里文字 *m*, *n*, *ŋ* をもつ車里語形は、漢字音写でも中古音で音節末鼻音をもつ (3) の韻類で音写される。ただし音節末鼻音の調音点は無視されている。(4) は車里文字別に音写漢字の韻類を整理したものの例の一部である。車里文字転写および音写漢字の欄では、音写を問題にしている音節末鼻音およびその音写漢字を斜体にしてある。

なお、表 (4) において、左欄の番号は『車里訳語』425 項目に筆者がつけた通し番号である。また、現代タイ・ルー語形は『傣仂漢詞典』より採取した。現代雲南音は竹越 (2007) によるものであり、現代北京音はピンインで示す。

#### (4) 音節末鼻音をもつ車里語形

	通し 番号	漢訳	車里文字転写	現代タイ・ルー <sup>11</sup>	音写漢字と (韻類)	現代 雲南音	現代 北京音
<i>m</i>	2	風	<i>lum</i>	<i>lum</i> <sup>51</sup>	崙 -n (臻)	仑 <i>luŋ</i> <sup>31</sup>	<i>lún</i>
	32	水	<i>nam(2)</i>	<i>nam</i> <sup>11</sup>	南 -m (咸)	<i>nã</i> <sup>31</sup>	<i>nán</i>
	64	濕	<i>jam</i>	<i>jam</i> <sup>41</sup>	眼 -n (山)	<i>iẽ</i> <sup>44</sup>	<i>yǎn</i>
	81	橄欖	<i>Ma:k(1)Pɔm(2)</i>	<i>ma:k</i> <sup>35</sup> <i>xam</i> <sup>55</sup> <i>pɔm</i> <sup>13</sup>	漫蚌 -ŋ (江)	<i>pã</i> <sup>22</sup>	<i>bàng</i>
	325	鹹	<i>tsim</i>	<i>tsim</i> <sup>51</sup>	井 -ŋ (梗)	<i>tɕi</i> <sup>53</sup>	<i>jǐng</i>
<i>n</i>	5	雨	<i>Fun</i>	<i>fun</i> <sup>55</sup>	忿 -n (臻)	<i>fɔ̃</i> <sup>22</sup>	<i>fèn</i>
	6	日	<i>Ta:van(2)</i>	<i>ta</i> <sup>55</sup> <i>van</i> <sup>51</sup>	大挽 -n (山)	<i>uaŋ</i> <sup>53</sup>	<i>wǎn</i>
	7	月	<i>Də:n</i>	<i>dən</i> <sup>55</sup>	楞 -ŋ (曾)	<i>lɔ̃</i> <sup>22</sup>	<i>léng</i>
	37	石	<i>Hin</i>	<i>hin</i> <sup>55</sup>	幸 -ŋ (梗)	<i>ɕi</i> <sup>22</sup>	<i>xǐng</i>
	220	舌	<i>lin</i>	<i>lin</i> <sup>11</sup>	林 -m (深)	<i>ɽ</i> <sup>31</sup>	<i>lín</i>
<i>ŋ</i>	42	江	<i>KHɔ:ŋ</i>	<i>xoŋ</i> <sup>11</sup> <i>nam</i> <sup>11</sup>	控 -ŋ (通)	<i>khon</i> <sup>22</sup>	<i>kòng</i>
	49	泥	<i>puŋ</i>	<i>puŋ</i> <sup>51</sup>	蚌 -ŋ (江)	<i>pã</i> <sup>22</sup>	<i>bàng</i>
	43	城	<i>tse:ŋ</i>	<i>tseŋ</i> <sup>51</sup>	整 -ŋ (梗)	<i>tsɔ̃</i> <sup>53</sup>	<i>zhěng</i>
	109	鷗	<i>mɛ: heŋ(2)</i>	<i>heŋ</i> <sup>11</sup>	咩閉 -n (山)	<i>ɕiẽ</i> <sup>31</sup>	<i>xián</i>
	192	姐	<i>pi:(2) jiy</i>	<i>pi</i> <sup>33</sup> <i>jiŋ</i> <sup>51</sup>	必隱 -n (臻)	<i>ĩ</i> <sup>53</sup>	<i>yǐn</i>
	157	坐	<i>naŋ</i>	<i>naŋ</i> <sup>33</sup>	喃 -m (咸)	南 <i>nã</i> <sup>31</sup>	<i>nán</i>

車里語形-ŋ の音写に-ŋ 韻類の漢字が正しくあてられる例は、車里語形-n, -m が正しく漢

<sup>11</sup> 通し番号 42 の *xoŋ*<sup>11</sup>*nam*<sup>11</sup> (「川の流れが曲がったところ」の意) のほかは、現代語でも『車里訳語』の漢語訳と意味が同じであることを示す。また、『傣仂漢詞典』では *a* と *a:* の対立を *ǎ* と *a* として表記しているが、本稿では表記を *a* と *a:* に統一する。母音/*ɤ*/に関しては、羅 (1993) および喻・羅 (2004) にしたがって、*ə* で表記する。

字音写される例より比較的多い。(4)の音写状況は、『車里訳語』で漢字音写した人間の方言漢字音で、音節末鼻音の調音点の区別が、少なくとも  $\eta$  の区別がある程度意識されているほかは、失われていたことを示唆する。

中古音以降、(3)に挙げた韻類の音節末鼻音がたどった変化は方言によって異なる。李(1987: 105)によれば粵語(広州語)は中古音の  $-m$ ,  $-n$ ,  $-\eta$  の区別を現在でも保存しているが、現代北京語では  $-m$ ,  $-n$  が  $-n$  に合流しており、閩北(福州)ではすべてが  $-\eta$  に合流している。漢字音の音節末鼻音  $-m$  は、北方ではすでに唐末に  $-n$  に合流しつつある記録があるという(ibid: 141)。『車里訳語』で音写に使われた漢字音でもすでに  $-m$  は完全に区別されなくなっていたと考えられる。

現代の雲南方言では、中古音で音節末鼻音をもつ韻類の大部分は鼻母音終わりの韻に変化しているという(『雲南省誌』: 138)。現代の普洱および景洪の音節末鼻音韻、鼻母音韻は(5)のようになっている(ibid: 84, 87)。

(5)

普洱 :  $\tilde{a}$ ,  $i\tilde{a}$ ,  $u\tilde{a}$ ,  $i\tilde{e}$ ,  $\tilde{e}$ ,  $\tilde{i}$ ,  $u\tilde{e}$ ,  $o\eta$ ,  $io\eta$   
景洪 :  $\tilde{a}\eta$ ,  $i\tilde{a}\eta$ ,  $u\tilde{a}\eta$ ,  $i\tilde{e}$ ,  $\tilde{e}$ ,  $\tilde{i}n$ ,  $u\tilde{e}$ ,  $o\eta$ ,  $io\eta$

景洪の音節末鼻音、鼻母音韻については、竹越(2007: 285-286)も同じ数の韻母を挙げている。

$\tilde{a}$ ,  $i\tilde{a}$ ,  $ua\eta$ ,  $i\tilde{e}$ ,  $\tilde{e}$ ,  $\tilde{i}$ ,  $u\tilde{e}$ ,  $o\eta$ ,  $io\eta$

これらの方言では、粵語以外の多数の方言と同様、音節末子音  $-m$  が失われたほか、普洱では音節末鼻音  $-n$  もなくなっている。(4)で示した漢字音写の状況は、現在の雲南方言の状況と通じている。

#### 4. 隋代から現代に至るまでの漢字音の変化

さて、音写漢字の対応を考察する前に中古音から近代音へ、近代音から現代音へ漢字音がたどった変化をここで確認しておきたい。ただしこれは北方官話の漢字音の変化である。

(6) 中古音から近代音までの間の変化(『切韻』から『中原音韻』まで)

- a. 有声阻害音の無声化
- b. 両唇音破裂音・鼻音から、弱化し摩擦音化した音が生まれた。
- c. そり舌音(知系、照<sub>2</sub>系)と舌尖の破擦・摩擦音(照<sub>3</sub>系)が合流し、無声のそり舌破擦・摩擦音になった。
- d. 音節末の  $-m$  が  $-n$  に合流しはじめた。

- e. 音節末破裂音が失われはじめた。
- f. 声調の変化: 有声の初頭子音 (全濁声母) の上声が去声に変化  
4つの声調 (平上去入) がそれぞれ陰・陽の2類に分化  
(分化の仕方は方言によって異なる)

李 (1987: 139-142, 一部術語改変)

(7) 近代音から現代音までの間の変化 (『中原音韻』以降)

- a. 音節末-m が-n に合流する変化が終了
- b. 介音, 主母音に [y] が現れる
- c. r 化音の登場
- d. 初頭子音 η の消失
- e. 初頭子音 v の消失
- f. 初頭子音 k, k', x, ts, ts', s が i, y の前で口蓋化: k, ts → tɕ  
k', ts' → tɕ'  
x, s → ɕ
- g. 音節末破裂音が完全に消失

(ibid: 68-70, 一部術語改変)

## 5. 車里文字と音写漢字の対応

この節では、車里文字と音写漢字の対応をまとめ、分析し、18世紀タイ・ルー語の音の特徴や音写漢字の特徴を観察する。特に、音写漢字を3で述べた現代雲南方言の発音の特徴や、4でまとめた北京官話の漢字音変化などと比べて、どの地域の漢字音を反映しているのかを推測する。

5.1 から 5.5 までは、車里文字の初頭子音を次のように分類して、その音写漢字との対応を扱う:

- 5.1: 鼻音字母 (車里文字 M, m, N, n, η)
- 5.2: 破裂音字母 (車里文字 PH, ph, P, p, B; KH, kh, K, k, KW, ?)
- 5.3: 破擦音字母 (TS, ts)
- 5.4: 摩擦音字母 (F, f, V, v; S, s; X, x, XW, xw, H, h)
- 5.5: 側面音/ 接近音字母 (L, l, J, j)

また 5.6 は音節末子音を扱う。なお、音節末鼻音については、すでに3節でまとめてある。

## 5.1 鼻音字母: 車里文字 M, m, N, n, ŋ

(8)

車里文字	音写漢字の中古音での初頭子音類: 音写漢字例
M	m (明): 妹罵悶埋漫木覓邁命賣
m	m (明): 猛埋瞞們滿咩麻渺馬乜捫
N	n (泥): 膿鬧奈怒內嫩囊農納[女奈]那
n	n (泥): 那南鬧乃喃煖孀濃納迺諾 n̥ (日): 喏 l (来): 楞 ŋ (疑): 凝
ŋ	ʔ (影): 厄餵恩阿 ŋ (疑): 五

音節初頭の鼻音字母のうち、両唇音 M, m は、中古音でも両唇鼻音であった漢字で音写される。歯茎音字母のうち、高子音字 N はやはり中古音の n (泥) 類で音写されるが、低子音字 n はそのほかにも n̥ (日), l (来), ŋ (疑) であった漢字で書写されている。

現在の雲南漢字音では中古音の n̥ (日) 類は [z] であり (『雲南省誌』p. 143, 竹越 2007)、現代北京音では基本的に [z] である。『車里訳語』でも、n̥ (日) 類が摩擦音で発音されることを示す例がある (No. 121, 5.5 参照)。

低子音字 n の書写に使用された n̥ (日) 類の漢字は「喏」の 1 字のみであった (例: No. 97 nuKle: 「鸚哥」喏列<sup>12</sup>; No. 181 Xu:nnoK(1) 「外官」混喏)。この字「喏」の現代雲南漢字音は不明だが、現代北京音では 2 つの読み rě [z̥] と nuò をもっている。「喏」で写された車里語形が nuK, n̥K(1) など現代北京音 rě よりも nuò と初頭子音や母音の種類において近似性をもつことから、この字の初頭子音は n で読まれていた可能性が高いと考えられる。

『車里訳語』中には初頭子音として車里文字 ŋ が使われる項目が 5 つあるが、その 4 例が ʔ (影) 類の漢字で音写され (「厄」「餵」「恩」「阿」)、期待される ŋ (疑) 類で音写されるのはただ 1 例である (「五」で音写)。北京音では、ŋ (疑) 類はゼロへと変化した。中村 (2007) によればこれは北京とわずかな地域に限られた現象であって、北方全体の状況としては ʔ (影) 類を ŋ で発音する習慣が広まっていたという。車里文字 ŋ を ʔ (影) 類で多く音写している事実は、音写に使用された漢字音が北京官話以外のものであった可能性を示している。ただし 5.2.3 で見るように、車里文字 ʔ も ʔ (影) 類と ŋ (疑) 類とで

<sup>12</sup> nuK は鳥を意味する現代語 nok<sup>33</sup> に対応する。No. 97 のほか、鳥類を表す車里語形に使われる。



音写されており、ʔ (影)類, ɲ (疑)類で表される音の正確な音価は不明だが、この二つが近似していたらしいことはわかる。なお、竹越 (2007) によれば、現代の漢語景洪方言では音節初頭に ɲ-が立つことはない。

## 5.2 破裂音字母

### 5.2.1 車里文字 PH, ph, P, p, B

(9)

車里文字	音写漢字の中古音での初頭子音類: 音写漢字例
PH	p' (滂): 法帕破泮胖撇 p (幫): 扒迫 b (並): 盆
ph	p (幫): 扒 b (並): 盤
P	p (幫): 布半丙巴 b (並): 別蚌罷蚌敝被
p	p (幫): 版拜博波必丙 b (並): 蚌
B	p (幫): 播奔本并謗彪布 b (並): 辦蚌別備

まず、P, p, B すべてが p (幫), b (並) で音写されることから、音写に使用された漢字音にも、中古から近代の北方官話で起きたような有気阻害音の無声化 (6a) が既に起こっていたことがわかる。

PH, ph の音写に使われる p (幫) 類の音写漢字は「扒」「迫」の 2 字のみであるが、現代北京音では「扒」は有気音 ph と無気音 p の 2 つの読みがあり、「迫」は有気音 ph の読みしかない。このように「扒」「迫」は中古音では無声無気音であったが、その後北方では有気音化していることがわかる<sup>13</sup>。雲南でも北方と同じような有気音化が起こっていたと考えられる。

また PH, ph にあてられている b (並) 類の 2 つの漢字(「盆」「盤」)は、どちらも中古音で平声である。中古音で平声の有声破裂音は北方で無声有気音へ変化した。「盆」「盤」が PH, ph の音写に使われるいっぽうで、車里文字 P, p, B の音写にあてられる b (並) 類の漢字に平声のものがいないことは、音写に使用された漢字音が北方と平行的な音変化をたどっていることを示している。

<sup>13</sup> p (幫) 類がすべて有気音化したわけではなく、一般的には現代北京音でも無声無気 [p] で対応する。

### 5.2.2 車里文字 TH, T, t, D

(10)

車里文字	音写漢字の中古音での初頭子音類: 音写漢字例
TH	t'(透): 踏蛻探帖兔太貼
T	t(端): 敦 <sup>14</sup> 島丁戴登丟 d(定): 大道鄧第敦但度盪定代淡
t	t(端): 丹黨董等丟頂顛答堵 d(定): 惰疊
D	d(定): 大度動盪 l(来): 腊[=臘]楞滂 <sup>15</sup> 令頼落利連

車里文字 T, t に d(定)類があてられていることから、音写に使用された d(定)類の漢字にも(6a)の無声化がすでに起きていたことがうかがえる。

ただし D に t(端)類の漢字があてられている例はなかった。これは車里文字 B には p(幫)類もあてられていたのと異なる。『車里訳語』における音写漢字では d(定)類が無声化の途上にあったという見方もできるが、現代タイ・ルーで /d/ がかなり弱い閉鎖をもって発音される、すなわちはじき音 [ɾ] で発音されることが多いことがこれに関係しているかもしれない。仮に当時のタイ・ルー語でもはじき音 [ɾ] で発音されていたとすると、無声破裂音の t(端)類よりも有声性や閉鎖の弱さという面で l(来)類で音写することが選択されたとも考えられる。

### 5.2.3 車里文字 KH, kh, K, k, KW, ?

(11)

車里文字	音写漢字の中古音での初頭子音類: 音写漢字例
KH	k'(溪): 控看慶課考快庫 k(見): 媿 χ(曉): 耗臭
kh	k'(溪): 客開苦卡措 <sup>16</sup>
K, KW	k(見): 扛損京蓋戛潔共敬究緘見格幹姣高皆戒告光廣官

<sup>14</sup> 「敦」は端母、定母の2通りの読みがあるため、下線を引き双方に挙げた。以下の表でも下線を引いているものは2通りの読みのうちどちらか同定しにくいことを表している。

<sup>15</sup> 実際のつくりの上部は草冠でなく「火」を二つ並べてあるが、入力都合上この字で代用する。

<sup>16</sup> 「カ」「措」は『漢字古今音表』で検字できなかったが現代北京音でどちらも kh であるため k'(溪)類と見なしている。

k	k (見): 谷各簡敢過滾袞戛九干貴稿 k' (溪): 科
ʔ	ʔ (影): 歪噫奧要厄 ŋ (疑): 臥昂

車里文字 K, k は、No.165 「跪」 kuB を k' (溪)類の「科」で音写した 1 例を除けば、すべて k (見)類の漢字で音写され、g (群)類は使われない。『車里訳語』に出てくる音写漢字のうち、g (群)類の読みをもつのは「共」「近」「茄」の 3 つであるが、どの漢字も他の読みをもっている。「近」「茄」は、初頭子音と主母音の間に介音 i が介在するため、初頭子音が口蓋化し、歯茎破擦音の音写に使われる。「共」は、g (群)のほかに k (見)の読みもあるので、こちらの読みが音写に使われていると考えるのが妥当である。KW は基本的に K と同様であるが、「合口呼」と呼ばれる、u が後続する漢字音があてられる。

g (群)類は、介音 i をもつ韻以外とは結合しない。現代北京音ではこの類はすべて口蓋化している。車里文字の軟口蓋音字母で書かれた音節の音写に、g (群)類が使われないことは、音写に用いられた漢字音が、北方方言と同様、当時すでに口蓋化していたことを示唆する。

介音 i の前で口蓋化が起こったのは、無声の k (見)類も同様であるが、k (見)類の中には口蓋化せず軟口蓋音を保存しているような例もある。一部を以下に挙げる。

(12)

No.	漢語訳	車里文字転写	漢字音写	現代タイ・ルー	現代雲南漢字音	現代北京音
223	眉	kiu	九	kiu <sup>51</sup> ta <sup>55</sup> 「眉間」	tɕiu <sup>53</sup>	jiǔ
208	親家	Keu Dɔŋ	究動	対応語なし	tɕiu <sup>22</sup>	jiū
274	湯碗	Van(1) Keŋ	萬見	van <sup>35</sup> 「碗」 keŋ <sup>55</sup> xɛ <sup>51</sup> 「湯」	tɕiɛ <sup>22</sup>	jiàn
312	吃飯	Kin KHau(2)	京考	kin <sup>55</sup> xau <sup>13</sup>	tɕi <sup>44</sup>	jīng
369	寶	Keu(2)	姣	keu <sup>13</sup>	交 tɕiao <sup>44</sup>	jiāo
414	遠	Kai	皆	kai <sup>55</sup>	tɕiɛ <sup>44</sup>	jiē
415	近	Kai(2)	戒	kai <sup>13</sup>	tɕiɛ <sup>22</sup>	jiè

現代漢語では、雲南音でも北京音でも初頭子音はすべて口蓋化して[tɕ]である。現在のように口蓋化していれば、どちらの音体系でも ki や ke のような結合はなく空き間になっているため、Nos. 223, 208, 312, 369 にあるような、車里語形の韻を音写するために、[tɕ]で読む漢字をあてるのは、当然だったであろう。Nos. 414, 415 の例は音写漢字「皆」「戒」の韻がまだ ai であったことをうかがわせる。kai という音節は現代漢語においても空き間ではないため、当時「皆」「戒」がすでに口蓋化して[tɕ]で読まれていたならば、Kai, Kai(2)の音写にこれらの漢字は使われなかったであろう。

(11)のうち χ (曉)類の漢字で音写される項目は3例あり、「耗」「臭」の2字で音写される。

「耗」(Nos. 355, 372) は、「白」を意味する車里語形KHauの音写に使われる<sup>17</sup>。現代タイ・ルー語では[k<sup>h</sup>]と[x]は/x/に合流しており、この語も[xa:w<sup>55</sup>]のように摩擦音で発音される。k<sup>h</sup>と-auの結合は漢語でも可能であるにもかかわらずχ (曉)類で音写されるということは、この語が当時すでに摩擦音で発音されていたことを示す。

「臭」は車里文字 KHeu le: (No. 360, 漢語訳「鶯綠」) の音写「臭列」に現れ、さらに Xeu (No.352, 漢語訳「綠」) の音写「臭」にも使われている。「綠」は、現代タイ・ルー語でも、/xeu<sup>55</sup>/のように初頭子音が摩擦音である。上にあげた「白」の場合と異なり、漢語では-eu のような韻がないだけでなく、仮にタイ・ルー語-eu を漢語の-iou などの韻で代用したとしても k' (溪)類と介音 i を含む韻が結合すると子音は口蓋化して齒茎音になってしまう。したがって「鶯綠」「綠」の音写に χ (曉)類が使われたことをもって、当時のタイ・ルー語でこの子音が摩擦音化していたとはいえない。しかし、車里文字表記も KHeu /Xeu のように揺れていること、ならびに上記「白」の例を勘案すれば摩擦音化していたのであろうと推察される。ただ KH, kh の多くは k' (溪)で音写されており、χ (曉)類で音写される例は限られている。

以上により、『車里訳語』編纂当時のタイ・ルー語では /k<sup>h</sup>/と/x/が合流しはじめていたが、本来[k<sup>h</sup>]で発音されていたものの多くはまだ依然としてその音を保っていたことがわかる。

---

<sup>17</sup> No. 355 「白」 KHau, No. 372 「白玉」 KeuKHau

### 5.3 破擦音字母: TS, ts

(13)

車里文字	音写漢字の中古音での初頭子音類: 音写漢字例	
TS	k (見): 茄架兼 g (群): 茄近 t (知): 中 d (澄): 召 z (禪): 召	tɕ (章): 專征至 tʂ (莊): 債 ts (精): 精借
ts	k (見): 兼 t (知): 中	tɕ (章): 整章專枕 tʂ (莊): 齋扎 ts (精): 井

車里文字 TS, ts を書写した k (見), g (群) は、いずれも、現代北京音では「齋齒呼」「撮口呼」と呼ばれる、それぞれ i, y が後続するものである。口蓋化の結果、これら音写に使われた漢字音も、齒茎破擦音になっていたものと思われる。これは北方官話における (7f) の変化に対応するものである。

t (知), d (澄), tɕ (章), tʂ (莊), などが一様に音写に使われていることから、(6c) の変化と同様の合流も起こっていたことが見てとれる。ただし、『雲南省誌』 (: 55) によれば、現代雲南方言では、中古音にあったそり舌音と非そり舌音の区別を残しているものと、それを失ってしまった地域が、半々に分布している。たとえば、普洱ではそり舌後部齒茎破擦音と非そり舌の齒茎破擦音が弁別されるが、景洪ではその区別がなく後者だけになっている。

音写漢字のそり舌/ 非そり舌の区別は、5.4.2 で述べるように、S, s では存在する。しかし、TS, ts では、/ə/ が後続する例がないほか、それ以外の母音が後続していても t (知), d (澄), tɕ (章), tʂ (莊), などが同じように音写に用いられる。

### 5.4 摩擦音字母

#### 5.4.1 車里文字 F, f, V, v

(14)

車里文字	音写漢字の中古音での初頭子音類: 音写漢字例	
F	f (非): 發 f (敷): 忿泛費 v (奉): 奉肥焚泛	

f	f(非): 反訪法 f'(敷): 反訪捧菲
V	? (影): 歪 ŋ (微): 萬
v	? (影): 窩哇翁灣鴛 ŋ (微): 挽 fi (雲): 王羽

v (奉)類はもっぱら車里文字Fにあてられ、V, vの音写に用いられないことから、当時音写に使われた漢字音では(6a)の無声化が唇歯音においてすでに完了していたことがわかる。

現在の雲南では、ほとんどの地域で初頭子音vをもつ。またこれは中古音ŋ(微)類に対応する漢字音でvが出るとのことである(『雲南省誌』: 56, 143)。vの音写にŋ(微)類があてられているため、『車里訳語』の音写に使われた漢字音も、ŋ(微)類の「軽唇音化」によって当時すでにvであったと思われる。

V, vの音写に使われる?(影), ŋ(微), fi(雲)の漢字音は、初頭子音にすべてuが後続する。現代のタイ・ルー語では、/v/は音声的にはかなり摩擦が弱く、[w][v][v]などで発音される。?(影)類のように摩擦をとまなわない初頭子音類がV, vの音写に使われていることから、当時のタイ・ルー語の/v/も同様の音であったと推測できる。

#### 5.4.2 車里文字 S, s

(15)

車里文字	音写漢字の中古音での初頭子音類: 音写漢字例
S	s(心): 薩賽遜掃卸素悚醒孫撒先送散細四 ʃ(生): 色 ʒ(禪): 盛 z(邪): 謝
s	s(心): 腮醒賽

Sはほとんどがs(心)類で音写されるが、車里語形でəが後続するものはすべてʃ(生)類の「色」で音写される。車里文字sは3例しかなく、əが後続する例がないためか、すべてs(心)類で音写されている。

車里文字Sは全部で29例ある。そのうちʒ(禪), z(邪)類で音写されるのはそれぞれわずか1例、2例であった。これらが無声化の過程をすでに終えているならば、この数

はもっと多いことが予測される。5.2.2 に前述した歯茎破裂音と同様、歯茎摩擦音についてもまた、この音写漢字の字音は無声化の途上にあったようである。

現代のタイ・ルー語では、/s/は i の前でわずかに口蓋化して[sc̚]となる。『車里訳語』では、i が後続していても ɕ (書)類の漢字で音写されることはない。ɕ (書)類の有声音である ʒ (禪)類の漢字が使われるのは、i ではなく u が後続する 1 例のみである。したがって、音写に使われた漢字音では、北方官話の(6c)の変化と同様、そり舌音化をすでに完了していたことがわかる。また音写にそり舌音が混用されないことからそり舌/非そり舌の区別をもつ方言漢字音であることがわかる。

### 5.4.3 車里文字 X, x, XW, xw, H, h

(16)

車里文字	音写漢字の中古音での初頭子音類: 音写漢字例
X, XW	χ (曉): 漢休哈臭化 γ (匣): 賀毫混亥荷倅 k' (溪): 欠歉
x, xw	χ (曉): 好罕火呵血哈決 γ (匣): 恨酣緩懷
H	χ (曉): 哈歇喝轟休哖夯蠅 γ (匣): 幸回荷汗閑壞汗亥賀互混蠅
h	χ (曉): 哄悻 <sup>18</sup> 罕轟烘夯好歇軒哖 γ (匣): 哄悻還洪閑胡恨賀行淮

γ (匣)類が音写に使われていることから、軟口蓋摩擦音もすでに無声化していたことがわかる。

X の音写に k' (溪)類が使われる例は下記の 2 例ある。

No. 138 「蜈蚣」 Dɔ̃K(2)XɛB 漢字音写: 大欠

No. 339 「鞋」 XɛB 漢字音写: 歉

音写に使われた漢字は現代北京音ではそれぞれ -i, -y が後続し、[tɕʰ]で読まれる。雲南音ではどちらの韻も iɛ̃で、子音はやはり [tɕʰ]である。xi-, xy- のような結合は音節構造の空き間であるため、k' (溪)類が音写に使用されたものであろう。XW と xw は KW と同じように u が後続する漢字音で音写される。

<sup>18</sup> 「悻」は日本漢字音、現代北京音などから考えておそらく匣または曉と思われる。

## 5.5 側面音字母、接近音字母: L, l, J, j

(17)

車里文字	音写漢字の中古音での初頭子音類: 音写漢字例
L	l(来): 頼爛浪弄勞落楞稜另
l	l(来): 勒崙喇臘腊囉龍懶列來六籠林領楞勞
J	ʔ(影): 印映 ŋ(疑): 艾堯 ɦ(雲): 右
j	ʔ(影): 杳隱 ŋ(疑): 眼呀雅 j(以): 養勇野 ɳ(日): 忍

車里文字 L, l は l(来)類で音写される。現在の雲南方言では、普洱や景洪などを含む大多数の地域では区別される [l] と [n] が、地域によっては合流している(『雲南省誌』p. 54)。『車里訳語』の漢字音写では L, l は l(来)類、N, n は n(泥)類というように明確に区別されていて、混同がない。したがって音写に使われた漢字音にはこの区別があったということができる。

5.1 節で述べたとおり、中古音の ɳ(日) 類は現代雲南漢字音では [z] で現れ、現代北京音では基本的に [z] であるというように、摩擦音で対応する。ɳ(日) 類が摩擦音の音写に使われたらしい例は 1 例しかないが、例えば No. 121 「山羊」 jə:ŋ は ɳ(日)類の漢字「忍」で音写される。現代タイ・ルー語では、/j/ は摩擦をともなって発音されることから、ɳ(日) 類での音写はその摩擦を写したものと思われる。

ʔ(影)類で音写される例には i または e が後続するものが多い。例外は、音写に「杳」を使った次の 2 例だけである。

No. 74 「梧桐樹」 mai(2)Ma:K(1)jau(2) 漢字音写: 埋漫杳

No.167 「長」 jau 漢字音写: 杳

## 5.6 末子音 -B, -D, -K, -ʔ

音節末の破裂音 -p, -t, -k, -ʔ は車里文字 -B, -D, -K, -ʔ で書かれる。低子音字は使われない。

中古音で末子音をもっていた韻類は(3)のとおりで、この韻類で促音節であるものが



音節末に破裂音をもっていた<sup>19</sup>。したがって、もし『車里訳語』音写漢字で音節末の破裂音が保存されていれば、少なくともその音写漢字は促音節の韻であることが期待される。促音節であるか否かは、その音写漢字の声調を見ることでわかる。中古音では、促音節は「入声」と呼ばれる声調の一種とされていたので、入声ならば促音節ということになる。

しかし -B, -D, -K, -ʔ の末子音をもつ音節の音写漢字を調べると、入声である漢字で表記される例のほうが圧倒的に少ないことがわかった。ただし、中には入声の漢字を音写に使ひ、その上、末子音の種類まで車里語形に一致するものもある。以下に音節末に破裂音をもつ『車里訳語』見出し語のうち、入声字で音写され、かつ現代タイ・ルー語の対応形がわかっているものを例として挙げる。

(18)

	No.	漢語訳	車里文字転写	漢字音写	中古音での末子音	現代タイ・ルー語形
-p	12	氷霜	Sa(1) THa:B	薩踏	咸(-p)	saʔ <sup>55</sup> tha:p <sup>35</sup>
	276	碟	Van THεB(1)	萬帖	咸(-p)	van <sup>35</sup> te <sup>13</sup>
	11	雪雹	Ma:K(1) He:B(1)	罵歇	山(-t)	mak <sup>35</sup> hep <sup>55</sup>
	138	蜈蚣	DɔK(2) XεB	大欠	山(-t)	tak <sup>55</sup> xep <sup>55</sup>
	348	臥單	PHa:(2) LuB	扒落	宕(-k)	pha <sup>13</sup> lop <sup>55</sup>
-t	93	鴨	Pe:D	別	山(-t)	pet <sup>55</sup>
	324	辣	PHe:D(1)	撇	山(-t)	phet <sup>55</sup>
	350	穉	Sa:D TSe:n	撒近	山(-t)	tsen <sup>55</sup>
	385	八	PeD	別	山(-t)	pet <sup>35</sup>
	384	七	TSe:D(1)	借	梗(-k)	tset <sup>55</sup>
-k	72	松	mai(2) PεK	埋別	山(-t)	ko <sup>55</sup> pek <sup>35</sup>
	286	杓	Kʔ <sup>20</sup> a:K(1)	戛	山(-t)	ka:k <sup>35</sup>
	39	坑	khur:K	客	梗(-k)	xuuk <sup>33</sup>
	76	茉莉花	DɔK(1) tsɔ:n(2) noi(2)	落酸乃	宕(-k)	dɔk <sup>35</sup> ma <sup>ʔ33</sup> nit <sup>33</sup> noi <sup>11</sup>

<sup>19</sup> なお、中古音には末子音-ʔは存在しなかった。

<sup>20</sup> 「ʔ」は直前の字母の同定が虫食いなどによって困難であることを示す。

	128	蟒	ŋəK	厄	梗(-k)	ŋək <sup>33</sup>
	200	子	lu:k(1)	六	通(-k)	luk <sup>33</sup>
	241	骨	Du:k	度	宕(-k)	duk <sup>35</sup>
	243	胸	ʔuK	厄	梗(-k)	ʔok <sup>55</sup>
	425	深	ləK(1)	勒	曾(-k)	lək <sup>33</sup>
-ʔ	12	冰霜	Sa(1) THa:B	薩踏	山(-t)	saʔ <sup>55</sup> tha:p <sup>35</sup>
	184	僧	pha(1)	扒	山(-t)	phaʔ <sup>33</sup>
	51	凜	Pe	別	山(-t)	peʔ <sup>55</sup>

上の表のように、入声字で音写されるものだけを取り出すと、たしかに、-t の音写には山撰(-t)が、-k の音写には梗撰など中古音で-k であった漢字が使われる傾向が認められる。しかしよく観察すると、音節末子音-t の山撰での音写と、音節末子音-k の梗撰などでの音写を条件づけているのは、車里語形の音節末子音の前に来る母音であって、前舌母音が来るときは山撰(-t)、後舌母音が来るときは梗撰など(-k)となっている。また、全体としては、入声字で音写されるものは音節末に破裂音をもつ車里語形の半分に満たない。このような音写状況から考えるに、『車里訳語』で音写に使われた漢字音では音節末破裂音は失われていたと推測できる。末子音の母音によって入声字の使われ方に差があるのは、入声字にあった末子音が消失しても、その音声的な痕跡を、直前の母音が、当時まだ保存していた、という可能性が考えられよう。

## 6 おわりに

本稿では、『車里訳語』における 18 世紀タイ・ルー語形とその音写漢字を対照させ、それぞれの音節初頭子音および音節末子音の対応状況を分析した。その結果、次のことが明らかになった。

まず、音節末鼻音の調音点による区別が m, n だけでなく ŋ でも失われていることから、18 世紀タイ・ルー語の音は、現代の雲南漢字音と似た特徴をもつことがわかった。

さらに、音写に使われた漢字音は中古音から現代音に至る北方官話の音韻変化とおおむね同様の歴史的変化をたどっていることがわかった。具体的には、(6), (7a, g) であげた、すべての変化を経験していることが確認された。ただし (7g) は完全な消失ではなく痕跡が残っている可能性を示した。(7b, c)は全く確認されず、(7d-f)は部分的に同様の変化を経ていることがわかった。

また、現代の雲南漢字音は、地域によって、中古音にあったそり舌音と非そり舌音の

区別を残しているものと、それを失ってしまったものがある。タイ・ルー族の都である景洪の、現代の漢字音は後者に属するが、音写に用いられた漢字音はこの区別を残しているため、別の地域の漢字音であった可能性が高い。

なお、声調の検討は今後の課題として残された。

### 《参考文献》

- 馮蒸 (1981) 〈"華夷訳語"調査記〉《文物》2: 57-68, 北京: 文物出版社.
- 加藤久美子 (2000) 『盆地世界の国家論 雲南、シブソンパンナーのタイ族史』京都: 京都大学学術出版会.
- Li, Fang Kuei (1977) *A Handbook of Comparative Tai*, The University Press of Hawaii.
- 李思敬 (1987: 1995) 『音韻のはなし—中国音韻学の基本知識』慶谷壽信・佐藤進編訳, 基本中国語学双書 6, 東京: 光生館.
- 李珍華、周長楫編撰 (1999) 《漢字古今音表 (修訂本)》北京: 中華書局.
- 羅美珍 (1993) 〈車里訳語考〉《中国民族古文字研究 2》天津: 天津古籍出版社.
- 中村雅之 (2007) 「漢語ゼロ声母考」『KOTONOHA』51: 6-7, 愛知: 古代文字資料館.
- 西田龍雄 (2000) 『東アジア諸言語の研究 I』京都: 京都大学学術出版会.
- 竹越美奈子 (2007) 「西双版纳汉语景洪市区中青年音系简介」『佐藤進教授還暦記念 中国語学論集』pp. 285-296, 東京: 好文出版.
- 喻翠容、羅美珍編著 (2004) 《傣仂漢詞典》北京: 民族出版社.
- 雲南省語言学会編撰 (1989) 《雲南省誌 卷 58 漢語方言誌》中華人民共和国地方誌叢書, 昆明: 雲南人民出版社.
- 中国社会科学院語言研究所 (1981: 1983) 《方言調查字表 (修訂本)》北京: 商務印書館.